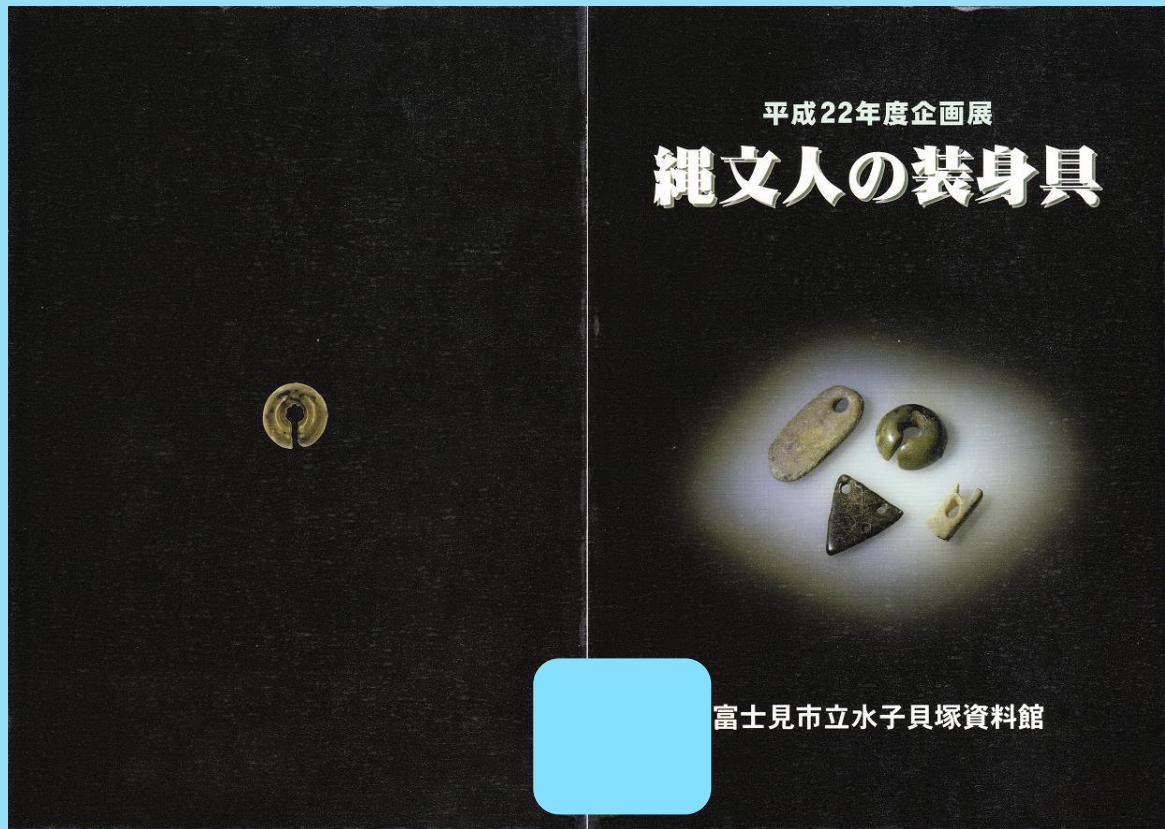




裏表紙

表紙

書 名： 平成22年度企画展  
**縄文人の装身具**

出版年月： 2011(平成23).1  
著 者： 富士見市立水子貝塚資料館

本サイズ： A4サイズ(210×297mm)  
ページ数： 25P

※当企画展の図録は水子貝塚資料館で販売（在庫の場合）

なか見！検索 コンテンツ：

- ・開催にあたって
- ・目次
- ・縄文時代の装身具
- ・縄文時代早期・前期の装身具
- ・ヒスイの穿孔実験（一部抜粋）

## 開催にあたって

縄文時代には、多種多様な装身具が製作されました。ペンダントやプレスレットなど現代人が身につけているアクセサリーがすでに8千年以上前から存在していました。石、動物の牙や骨、貝など自然のものを利用したシンプルなものですが、素材の特性を生かした独特の造形美があり、縄文人の強いこだわりや豊かな感性が伝わってきます。

現代のような製造道具がない時代、石製のペンダント一つを製作するのにもかなりの時間と労力が必要だったはずです。懸命に石に穴を開け、一心に石を磨いている、そんな縄文人の姿が思い浮かびます。そこまでして装身具を製作した理由はどこにあったのでしょうか。装身具は、単に体を飾るおしゃれとしての意味だけでなく、権威を表すもの、呪術や宗教との関係が深いもの、お守りや魔除けのものなど、その役割も多様だったと考えられています。そうした意味で、装身具には縄文人の美意識と同時に精神も表現されているのですが、その実態の多くは謎に包まれています。

今回は、埼玉県内の出土資料を中心に縄文時代の装身具を展示します。縄文人が心を込めて作り、魅せられたそれらの品々から太古の縄文社会をイメージしてみてください。そして、この展示をきっかけに地域の歴史や文化、考古学に関心をもっていただければ幸いです。

最後に、本企画展の開催にあたり、貴重な資料の出品にご快諾いただきました皆様、並びにご協力いただきました皆様に、心より感謝申し上げます。

平成23年1月9日

富士見市立水子貝塚資料館

## 目 次

開催にあたって

目 次

例 言

|                       |    |
|-----------------------|----|
| 縄文時代の装身具              | 1  |
| 主な装身具                 | 1  |
| 縄文時代早期・前期の装身具         | 3  |
| コラム1 ヒントは墓から①早期末葉・前期編 |    |
| 縄文時代中期の装身具            | 7  |
| コラム2 人面装飾付土器にみる耳飾り    |    |
| コラム3 ヒントは墓から②中期編      |    |
| コラム4 「軽石製浮子」は本当に浮子なのか |    |
| コラム5 イタボガキと貝輪製作       |    |
| 縄文時代後期・晩期の装身具         | 13 |
| コラム6 土偶にみる耳飾り         |    |
| コラム7 ヒントは墓から③後期・晩期編   |    |
| ヒスイの穿孔実験              | 21 |
| 協力者・協力機関              | 25 |
| 主な参考文献                | 25 |



## 縄文時代の装身具

縄文時代（約15,000年前～2,300年前）の装身具は、早期前半から製作されていますが、遺跡からの出土が顕著になるのは前期前半からです。この頃は定住化により大規模な集落が形成され、遺跡数も増える時期にあたります。

種類は、髪飾り（かんざし、ヘアピン、櫛）、耳飾り、首飾り（ペンダント、ネックレス）、腕輪（プレスレット）、腰飾りなどがあります。素材は、主に動物の骨・角・歯、貝、石、粘土、木ですが、木質のものは通常腐ってしまうため、あまり残っていません。また、緑、赤、黒、白といった色調のもの、磨くと艶が出て光沢を帯びるものが特に好まれたようで、ベンガラや漆で赤彩されたものもあります。

遺跡から出土する装身具は、土器や貝殻と一緒に捨てられた状態で見つかることがほとんどです。中にはまったく破損していないものもあり、なぜ廃棄してしまったのか疑問です。また、その数も極めて少ないことも特色です。前期や中期の遺跡では、住居跡が100軒を超える大規模な遺跡からでも総数10点に満たないことが普通です。一方、墓と考えられる穴（墓坑）からも装身具が出土することがあります。被葬者の副葬品や体につけられていたものと思われますが、そうした墓坑も数基にすぎません。こうした事例から、装身具は村人全員がつけていたのではなく、村のリーダーや呪術・祭祀を司る特別な地位にある人に限られたもの、いわば権威の象徴であったと考えられています。

では、装身具は男女間で着用する種類が異なるのでしょうか。貝塚には貝の主成分であるカルシウムによって埋葬された人骨が腐らずに残っています。装身具を身につけた状態のものはまれですが、男性には猪の牙製首飾りや腕輪が、女性には腕飾りの貝輪が伴っています。牙製首飾りは、狩猟した獣の一部を身につけることにより、自分の力を誇示し、その獣のもつ強い生命力や霊力を宿し、お守りや魔除けとしたとの考えもされています。一方、貝の採取は主に女性の仕事と考えられていますから、貝輪も牙製装身具と同じような意味をもつものかもしれません。しかし、実際に縄文時代に性差によって身につけていた装身具の種類が異なっていたのかの確証はなく、民族事例では男性も女性も首飾りや耳飾りをつけていますから、性別に関係のない男女兼用のものもあったと思われます。

装身具の装着は単なるおしゃれだけでなく、それ以外にも何らかの意味があったと想定されます。しかし、種類も多く、すべてを同一にみなすことはできません。日常的につけていたものもあれば、祭祀や儀礼のときに限定して使用されたものもあったはずです。さらに、縄文社会の習俗、慣習の変化や地域差、地方差も考慮しなければなりません。

### ※縄文時代の時期区分

|                          |                        |
|--------------------------|------------------------|
| 草創期（約15,000年前～約11,000年前） | 早期（約11,000年前～約7,300年前） |
| 前期（約7,300年前～約5,500年前）    | 中期（約5,500年前～約4,500年前）  |
| 後期（約4,500年前～約3,200年前）    | 晩期（約3,200年前～約2,300年前）  |

## 縄文時代早期・前期の装身具



石製玦状耳飾り・白玉(早期後葉)  
桶川市滝の宮坂(たきのみやざか)遺跡出土  
埼玉県教育委員会蔵  
左/径2.7厚0.9 右上/径1.1厚0.9 全て滑石製



石製玦状耳飾り(早期末葉～前期前葉)  
富士見市打越(おっこし)遺跡出土 当館蔵  
上段左/径2.7厚1.0 全て滑石製  
上段左から2・3番目、下段左から3番目には補修孔がある。  
下段右端のものの切り込み脇の穴は、耳飾りが脱落しないように紐を通すためのものと思われる。



石製玦状耳飾り(早期末葉～前期前葉)  
富士見市打越(おっこし)遺跡出土 当館蔵  
下段右/径1.1厚0.4 全て滑石製



石製玦状耳飾り(早期末葉～前葉)  
富士見市内遺跡出土 当館蔵  
左/殿山 上段左/貝塚山 同右/北通 下段左/貝塚山  
同右/唐沢 右/南通 左/径3.5厚0.7  
殿山・貝塚山(上)緑泥石、他滑石  
唐沢と南通の2点は破損部に研磨痕があることから垂飾りとして再利用されている。



石製玦状耳飾り・白玉・小玉・垂飾り(前期後葉)  
ふじみ野市鷺森(さぎのもり)遺跡出土  
ふじみ野市立上福岡歴史民俗資料館蔵  
上段左/径3.5厚0.5 上段2点/径1.5厚1.3 右/長2.8幅1.3  
厚0.6 上段2点蛇紋岩製、他滑石製  
上右2点は同一墓坑出土。調査報告書では耳飾りの可能性も指摘。  
右は管玉の半割したものを垂飾りとして再利用している。



土製玦状耳飾り(前期後葉)  
富士見市打越遺跡・東台(ひがしだい)遺跡  
出土 当館蔵  
左/径(4.2)厚0.8 右/径(3.4)厚1.7





土製玦状耳飾り（前期後葉）  
杉戸町木津内（きづうち）貝塚出土  
埼玉県教育委員会蔵  
左／径（3.1）厚1.1 右／径（4.2）厚1.2



土製玦状耳飾り（前期後葉）  
市川市庚塚（こうづか）遺跡  
市立市川考古博物館蔵  
左／径（3.4）厚1.9 右／径（3.6）厚1.2

## コラム 1

### ヒントは墓から① 早期末葉・前期編

玦状耳飾りが、耳につけた装身具であることが最初に確認されたのは国府遺跡（大阪府藤井寺市）で、人骨の頭部<sup>こゝ</sup>から玦状耳飾りが出土したことによります。しかし、こうした装着の様子ははっきりわかることはまれです。通常の遺跡では骨は溶けてしまい残っていないため、装身具のみが出土することが大半だからです。

縄文時代早期末葉<sup>かみはまだ</sup>の上浜田遺跡（神奈川県海老名市）からは3基<sup>ばこ</sup>の墓坑からそれぞれ2個の玦状耳飾りが出土しています。3基とも平面形は東西方向に長い楕円形で、玦状耳飾りは西端から発見されています。西に頭を向け葬られた人の耳についていたものと考えられています。

前期中葉<sup>ねごやだい</sup>の根古屋台遺跡（栃木県宇都宮市）からも上浜田遺跡と同様に2基の墓坑から一対の玦状耳飾りが出土しています。これらに隣接して複数の管玉と小玉を伴った2基の墓坑も同時に確認されました。これらを被葬者が身につけていたものとする、と、玦状耳飾りと玉類は同時に装着していなかったことになり、両者には何らかの差があったこととなります。考え方の一つとして、国府遺跡の事例から玦状耳飾りは女性のもの、玉類は男性のもので、両者は夫婦のような近い関係であったという見方がされています。しかし、桑野遺跡（福井県あわら市）から玦状耳飾りと垂飾りなどが一緒に出土し、その限りではないようです。

前期後葉<sup>とぎのもり</sup>の鷲森遺跡（埼玉県ふじみ野市）では集落と墓坑群が調査されています。約70m四方

の範囲に及ぶ墓域の中で、玦状耳飾り、垂飾り、玉などの装身具を伴う墓坑4基は3m四方の範囲に集中していました。明らかに他の墓坑と区別されており、被葬者は特別なグループだったことがわかります。



上浜田遺跡の墓坑と玦状耳飾り



玦状耳飾りの出土状態

\*\*\*この項目内から、その一部を抜粋\*\*\*

## ヒスイの穿孔実験

縄文時代の遺跡からは、各地で様々な装身具が出土しています。その芸術性にも驚かされますが、現代と違い用途に特化した機械もない時代に、硬度7のヒスイや石英に孔を<sup>うが</sup>ち装飾を施す技術とそれに要した労力がどれほどのものであったかは、既製品の取得が容易な現代人には考えづらいことでしょう。その製作の工程や技術については、発掘調査や研究者による研究により解明がなされてきました。ここでは、これまで研究されてきたデータを基にヒスイへの穿孔実験を試みました。

※モース硬度…鉱物に対する硬さの尺度。1から10までの標準物質がある。硬度1は滑石、硬度10はダイヤモンド。

### 【使用道具】

弓錐式穿孔道具（弓素材・錐本体素材＝リョウブ製／錐の芯部＝径5mmの篠竹）、  
ヒスイ原石（縦5cm×横3.5cm×厚さ5mm／板状）、  
媒材（川砂）、固定用台座、穿孔部位固定用ガイド



穿孔道具一式（左から  
台座・ガイド・錐・弓）

### 【穿孔方法】

ヒスイの穿孔方法については、鈴木道之助が福井県鳥浜貝塚より出土した約30cmの小形弓状木製品をもとに論証した弓錐を想定し（鈴木 1981）、錐の芯部は寺村光晴が指摘した竹管を使用して実験を試みました（寺村 1965）。研磨材の役割を担う媒材については、容易に調達可能で、且つ弓錐の媒材として用を成しうる粒子の大きさを持つものであることを考え、川砂を使用しました。砂は富士見市と志木市の境を流れる柳瀬川のものを利用しました。

実験については、ヒスイの穿孔に要する時間・経過の様子を詳細に把握するため、1分毎に「ヒスイの穿孔深度」と「芯（竹管）の消耗度」を計測し、媒材である川砂をヒスイと芯の摩擦部位表面に撒くこととします。そして媒材を馴染ませるため、竹管を水で湿らせながら実験しました。また、ヒスイの石質を考えると表面が滑らかで、摩擦部位がすべて安定しないためヒスイ固定用に台座とガイドを設置しました。五十嵐睦は穿孔の工程として、意図する一点に正確に穿つためにヒスイ表面に傷を付け、摩擦部位を安定させる“穿孔点の作出”を指摘していますが（五十嵐 2007）、今回の実験では、工程よりも弓錐によるヒスイの穿孔経過の把握を重視しています。

なお、穿孔経過が、回転数のばらつきに左右されないように1分間のストローク（弓の前後運動）数を130～140往復としています。